

# 都市教養プログラムの改革と授業評価

都市教養プログラム部会長、都市教養学部人文・社会系准教授

沼崎 誠

本稿では、はじめに今年度からの都市教養プログラムの改革点を述べ、その後、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が実施した2009年度前期における、「都市教養プログラムの授業評価（SE＝学生による授業評価、TE＝教員による授業評価）」の結果について報告する。

## 【今年度入学生からの都市教養プログラムの変更】

今年度入学生から、都市教養プログラムはシステムの改変をおこなった。昨年度までの入学生は、4つのテーマ（①文化・芸術・歴史、②グローバル化・環境、③人間・情報、④産業・社会）から1つを選び、5つの系（(1)人文・社会系Ⅰ、(2)人文・社会系Ⅱ、(3)技術・自然系Ⅰ、(4)技術・自然系Ⅱ、(5)現場型インターシップ）から4つの系にわたり8単位以上を履修し、後は自由に合計14単位以上履修する必要があった。このシステムは、1つのテーマについてさまざまな領域の学問からのアプローチを学習させるという観点からは望ましいものであったが、学生にとって履修の縛りが強すぎ、語学や専門科目とバッティングしやすく、所属学系（特に専門科目が南大沢キャンパス以外が中心となる学系）によっては履修が非常に難しいという問題があり、学生からも改善の要望が多かった。また、授業提供側にも、非常勤による開講を原則認めず、科目名称にピンポイントなものが多いため、教員の退職やサバティカルによって開講が困難な科目が生じてしまうという問題があった。そのため、今年度からは以下の変更を行った。①テーマの縛りを外した。系に関しては、各学部学系によって異なるが、これまでよりも緩やかな縛りとした。しかし、習得の目安としてテーマは引き続き明示しておくとともに、系に関しては人文・社会系と技術・自然系に履修が偏らないような縛りを残した。②「その他の共通科目」を都市教養プログラムに組み込んだ（これらの科目のテーマとして「共通」を設けた）。③一部の科目を開講しやすいよう名称に改めた。

上記変更に伴って、本年度の授業評価からは、これまで授業評価の対象となっていなかった従来の「その

他の共通科目」も、都市教養プログラムに組み込まれたため、授業評価の対象となっている。

## 【調査概要】

調査対象と回収率はTable 1の通りである。ここ2年間の前期調査と比べると、授業数や担当教員数レベルではほとんど変化がないが、履修登録者レベルで見ると、50.5%→48.6%→45.7%と回収率は低下傾向にある。また、都市教養プログラムは他の基礎・教養教育科目に比べて教員の回収率が低いことも問題であろう。

Table 1 調査概要

	対象	回収	回収率
SE 履修登録者(名)	14186	6468	45.7%
授業数(クラス)	94	84	89.4%
TE 担当教員数(名)	129	91	70.5%

Table 2 質問項目 (SE)

態度: 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ
意識: 授業の目的を意識しながら学習することができた
説明: 教員の説明はわかりやすかった
対応: 教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた
時間: 授業時間外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか?
成績: 成績評価方法について十分な説明があった
成果: シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた
満足: 私はこの授業を受講して満足した
シラバス: この授業の選択に当たって、シラバスが役に立った
難易度: この授業の難易度は、あなたにとってどうでしたか
視野拡大: この授業を受講して、自分の視野が広がった

SEの質問項目はTable 2に示したとおりである。「シラバス」以降は都市教養プログラムの独自の質問項目である。TEの質問項目は、SEと同一の焦点について、教員の自己評価や学生の態度を観察した評価を尋ねている。回答は「強くそう思う・そう思う・どちらとも言えない・そう思わない・全くそう思わない」から選択し、順に5・4・3・2・1の点を与えた。ただし、

「時間」は「2時間以上・90分程度・1時間程度・30分程度・ほぼ0時間から」、「難易度」は「易しかった・やや易しかった・どちらとも言えない・やや難しかった・難しかった」から選択させた。これら選択式の質問項目以外にも、「この授業で改めて欲しい点」「この授業で良かった点」「授業やカリキュラムについて」の3点について自由に記述させる項目を設けた。

学生データの質問に対する回答の平均値と標準偏差はTable 3の上段に示したとおりである。学生データの比較ため、教員データの各質問に対する回答の平均値と標準偏差もTable 3の下段に示した。ここではSEデータの全体傾向、SEデータとTEデータの比較、自由記述の回答、の順で報告していく。

### 【SEデータの全体傾向】

回答内容が異なる「時間」「難易度」を除くと、学生の評価の高い項目は、「視野拡大 (3.60)」「説明 (3.51)」「満足 (3.51)」であり。評価の低い項目は、「シラバス (3.14)」「成果 (3.17)」「意識 (3.25)」である。クロスロード6号で宮台教授が指摘しているように、実質満足に関する項目が高く、シラバス関連項目が低いことは（この結果の解釈についてはクロスロード6号を参照）、これまでの調査と変化はない。

「時間」に関しては、ここ2年の前期調査と比較すると1.35→1.55→1.60とわずかながら増える傾向にあるものの、これまでも指摘されているように、単位の実質化という観点からはまだ不十分と言えよう。

### 【SEデータとTEデータの比較】

教員の自己評価の高い項目は、「視野拡大 (4.19)」「説明 (4.14)」「意識 (4.08)」であり、評価の低い項目は「満足 (3.58)」「態度 (3.65)」「成果 (3.67)」である。また、学生との乖離が大きい項目は「意識 (0.83)」「シラバス (0.66)」「説明 (0.63)」「視野拡大 (0.59)」である。

学生の評価の高い「視野拡大」と「説明」は教員の自己評価が高いと同時に、乖離の大きな項目になっている。教員が重視をしている項目で学生の評価が高い点は望ましいことであるが、乖離が大きいことも見逃

してはならないだろう。

「説明」は教員の自己評価が高いにもかかわらず、学生の評価の低い項目に入っており、乖離も大きい。大規模教室での大人数科目が多いという都市教養プログラムの性質による問題かもしれないが、この点は自覚を持って改善をする必要がある。

「時間」に関しては、教員自体の自己評価でも学生への要求が低く、ここ2年の前期の調査と比較すると1.79→2.07→1.83となっており、学生との乖離は少ない。これは教員側が学生に時間外学習を課していないことを意味し、昨年度に比べても教員が時間外学習を課していないという自覚もあることを意味している。この点に関しては、教員側の問題が大きいと言えよう。

### 【自由記述回答から】

学生の自由記述で、改めて欲しい点と良かった点の双方で多く指摘されていたのは、AV機器関連であった。まず、教員がAV機器の使用になれていない点に関して不満が多かった。この点は、教室ごとにAV機器の使用方法が異なっており使用方法に関して教員と事務との連携がうまくいっていないといった問題があると思われる。また、パワーポイントを使用している授業に関して、スライドが見にくい、スライドの切り替えが速すぎる、スライドを資料として配付して欲しい、といった改善要求が多い。その一方で、パワーポイントを含めてAV機器の有効利用が良い点として指摘されることも多い。これは、AV機器を授業で使うことが一般化している中で、教員間にリテラシーの格差が広がっていることを示唆している。FDの活動の中で、事務との連携を含めて、教員間のAV機器の使用に関するリテラシーの格差の解消が必要であろう。

### 【まとめ】

今年度から都市教養プログラムは改革をおこなったが、学生の評価や教員の評価には過去2年間との比較では大きな変化は見られなかった。新しいシステム初年度の調査であり今後の動向を見ていく必要がある。

Table3 学生および教員の各項目の平均値 (M) および標準偏差 (SD)

		態度	意識	説明	対応	時間	成績	成果	満足	シラバス	難易度	視野拡大
SE	M	3.30	3.25	3.51	3.45	1.60	3.38	3.17	3.51	3.14	2.69	3.60
	SD	1.00	0.98	1.03	0.91	0.94	1.04	0.90	1.03	1.02	0.83	0.98
TE	M	3.65	4.08	4.14	3.86	1.83	3.81	3.67	3.58	3.80	2.87	4.19
	SD	0.72	0.67	0.71	0.74	0.85	0.88	0.72	0.69	0.80	0.60	0.74